

十二月二十八日、パラオの瑞穂の兵站病院に入院させられました。

病院といっても床は木の丸太をならべ、その上に枯草を敷いて寝ていた。四十度ぐらいの高熱が二十日間ぐらいつづいたのち、熱はさがったが院長診断で「内地へ帰れ」といわれ、船に乗った。

初めはマニラへ行く予定だったが、十二月三十日にパラオ港を出て、昭和十九年一月十一日宇品港へ入港しました。

宇品から広島陸軍病院第二分院に転送され、原隊復帰して、八月三十一日復隊しました。

再召集は昭和二十年八月十五日鳥取の部隊へはいつたが、同日終戦、即日召集解除となったのです。

東部ニューギニア

第七十九連隊

ジャングルの苦闘

島根県 上田 健二

―上田さんは何年徴集で何処へ入隊したのですか。

私のニューギニアへ出発するまでの略歴は

十六年十二月十日 朝鮮第四十三部隊に入隊。

(歩兵第七十四連隊)

十七年三月一日 幹部候補生に採用。

(志願者四百人・採用五十五人)

十七年四月一日 乙種幹部候補生に決定。

(甲種二十五人・乙種三十人)

十七年五月一日〜十七年十一月三十日

福地山教育隊に入隊。

十七年十二月五日 朝鮮第二十二部隊に転属。

(歩兵第七十八連隊)

十七年十二月十日 南海派遣軍猛、朝第二〇五三部隊
作業隊に転属。

一猛というと第十八軍、朝という第二十師団です
が、何時出発したのですか。

十八年一月四日に南方戦線に出陣のため宮門出発して
一月十日釜山港を出航しました。

大分沖で三十隻の船団の集結を待つて一路南へ出航、
途中鹿児島島の桜島を右手にみて内地に最後の別れをおこ
ない、これで二度と生きて日本の土をふむことは不能か
と感慨無量でした。

船上で始めて戦況不利な「ガダルカナル」救援の作戦
命令を受けました。気候風土のことなる南方の島、食糧
補給も十分でない灼熱の地に思いをはせ（現地の様子は
軍事機密に類するか、それとも情報皆無かはずれにして
も一さい知らされず）、毎日が敵潜水艦・飛行機の攻撃
に対処する避難訓練に明け暮れでした。

台湾沖を通過の頃、命令の変更で（「ガ島」撤退のた
め）パラオに上陸待機を知らされた。パラオ港を目前に
して米軍の潜水艦（三―五隻）が同港周辺の珊瑚礁の陰

にかくれおり入港不能で、連日我軍の空爆、駆逐艦によ
る爆雷攻撃でけきたいしたが、この間洋上で船団は立ち
往生すること一週間にも及びました。

パラオ島に上陸、港の岸壁は南方補給基地のため、お
びただしい軍事物資の山が何百メートルもつらなってい
た。

―ガ島の第二師団と第三十八師団等主力が撤退開始し
たのは二月一日ですから、間一髪でしたね。ニュー
ギニアまでは大丈夫でしたか。

十八年二月二十五日に東部ニューギニア戦線参戦の命
令で部隊の先遣隊として他部隊とともに七隻の船団で出
航。赤道通過頃は洋上には風はまったくなく、船室には
いらず船上の甲板で過ごした。その間は敵の攻撃もな
く、これが戦場の近くを航海する軍用船団だということ
を忘れがちな気楽な気分です。毎日を通し、ときどきくる
南方特有のスコールで裸になり汗を流した。

十八年三月九日ニューギニア島ハンサ湾には平穏な航
海をつづけ予定通り無事に入港でき（朝九時頃）、上陸命
令を待つ間甲板にて湾内の景色を眺めると湾内は波が

静かで遠浅で、船団は相当沖に投錨しており南方の太陽が波頭に照り輝いて陸上には立派なヤシ林が遠くまでつづき、絵をみるようで、ここが戦場かと一瞬忘却するほどの静かな場所でした。ところが空襲々々と叫ぶ声と、大至急上陸するよう指示する軍参謀の目の色をかえた姿をみて、とたんに夢はさめ現実の戦場に投げ出されました。

これまで船団が投錨すると空襲が繰り返しあり兵員、資材、糧秣等多大の損害がでており、当時すでにこれをげいげきする我が空軍はなく、制空権は米国にあった由、はしけに乗り上陸を無事に終え、兵器資材も揚陸を完了した。(後日聞いた話では三日後に船団は湾内で空襲をうけ約半数が被団しせつかく集積した各種器材糧秣も焼失した由)

—静かな海岸が一瞬で地獄になる。制空権がないから敵の思うまま、なすがままですね。上陸後は。

上陸した翌日に出発の命令で船舶工兵の大発に夜間乗船し、沿岸伝いに進み、昼間はヤシ林やマンゴロープの木のかげにはいつて空襲・魚雷艇の攻撃をさげ、休憩睡

眠をとり、夜間だけ前進して三日間の行程でマダンの手前アレキシスハーヘンで下船した。

これからさきは「大発殺し」と呼ばれる敵魚雷艇のちようりようする海域にはいるので、陸上を徒步行軍することに切りかえた。陸上も昼間は敵の飛行機の定期便で安全でないので、夜行軍です。昼間はヤシ林のなかに蚊帳をつって一個分隊(十四人づつ四方から頭だけいて蚊の襲撃を避けたいと考えたがニューギニアの蚊は猛烈なマラリヤ蚊で、人間の血の臭をかいて我々にむらがり、そとに出した足を刺したので、たちまち発病。キニーネという白と黄の薬品(硫酸キニーネ、塩酸キニーネ)を若下衛生兵が携行していたが、すぐ品切れる状態で落伍者が続出した。

このヤシ林はドイツ人が始めに宣教師として入国し教会をつくり土人を手なづけたうえで植林したもので、乾燥コブラを三か月に一回ぐらいの割りりでドイツ本国から集荷のため船が来る。

—その後は自動車道路建設工事だったそうですが。

十八年四月十五日〜十八年九月一日、国道一号線道路

作戦（ボガジン〜ラエ間延長三百メートル幅員四メートル）で軍用トラックを通すための自動車道建設の突貫工事だ。この計画は、ラエ地区への海上輸送が敵機・敵潜水のちよりようで我が軍の損害甚大となり、これ以上の船団輸送は不可能になったためです。

しかし、同地区の増援は日増しに戦況不利となつているので、急を要するため、これを解決する手段として、時間是要するが海上よりより安全確実な陸上輸送をと、中央山脈、ごえに新しく道路をつくる大工事に着手したわけです。これに投入された兵力は第七十八・七十九の両歩兵連隊（共に京城編成）で、銃を捨てつるはしを持って、炎熱下裸一貫全身に汗して土ほり、地ならしに土方人夫の仕事に没頭した。作業中、毎日我々のいう定期便が上空に現れ、丸腰上半身裸の我々は右往左往して樹木のかげなどに難を避け、ただ敵機が去るのを待つのみで制空権を持たない我軍の前途を不安に思った。

敵機は我軍の抵抗が全然ないので、自由自在に積んで来た爆弾（主として十五キロたまには百キロあり）を宣傳ビラをまくように投下し終わると、機から半身を乗り

だし、飛行服にメガネをかけ白のマフラーを風に波打たせ、機銃を我が物顔でうつ姿が明瞭にわかったもので残念がったものだ。

六月〜十二月の間は雨期にはいり毎日午前中はすごいスコールが降る。一区の作業を完了し、つぎの新しい工区に移動時にこのスコールにあうと頭から下腹部までぬれネズミになって、暮舎の設営に必要なバナナの葉取りに一生懸命になったものでした。

―戦争末期は南方でも、中国大陸でも制空権がなく敵機のなすがままでくやしかったものです。なんで日本軍の飛行機がこないのかと。ところで、ニューギニアの戦況は、東部からすでに圧迫されたのでしよう。

それでは十八年九月一日〜十八年十月五日の間、順次戦況を申しましょう。

①フィンシハーヘン方面の戦況いよいよ悪化し、この方面増援のため道路工事は中止し、第七十九連隊は現場から四百キロもはなれおる第一線へ大至急転進した。歩兵団長中井増太郎少将指揮下の我が第七十八連隊はナサブ

平原（ラエ背面）に降下した濠軍をげいげきせよとの命令で前進を開始した。

そのときの支給糧秣の内訳はつぎの通りで、戦闘が何か月になるかはかり知れないが、これですべてであり、食いのばせるだけのばし、大切に扱うよう指示された。

その内容は米一斗、塩・粉味噌・醬油・若干、乾パン五袋、携帯燃料三個等。

部隊は山あいの土人道（幅半メートル）を二列縦隊で行軍し、五日間ぐらいの日程で平原にでた。（草の高さは二メートルぐらい）。前線より連隊長の松本大佐が現地馬に乗り当番兵一人を連れて急ぎ足で引き返して来た。

「濠軍の落下傘部隊が我軍の後方に降下、の情報がある。大至急最後の防禦地点（歡喜嶺）の線まで後退せよ。」

との命令を発し、自分が真先に後退してきて、兵団長はいまだ前線であった。

我が中隊も、再度いまた道を（雨期ですごい降雨、道路には川のように水が流れ）泥濘を膝までつかりながら引きかえした。

—次が歡喜嶺附近の戦斗ですね。

②歡喜嶺で雨のなか、一夜を明かしたうえ部隊前方約五キロ地点に前進し、防禦陣地を構築せよとの命令を受け、昨日引返した道を谷川に防禦陣地を構築して濠軍の攻撃にそなえた。

その翌朝、自動小銃で装備した濠軍の不意の攻撃を受けた（陣地正面のジャングルのなかから）。弾丸は二十五連発銃で、狙いも何もあったものではない、ただめくらうちで雨あられの如く我が陣地にうちこまれた。我軍は壕から全然頭をあげることも出来ず、防戦どころか三八式歩兵銃では撃てなかった。

他分隊の兵隊で勇敢なのがいて、壕から身を乗り出し応戦したところ、五人余り負傷した。この陣地も結局防禦には適さずとの理由で、三日後の夜半、二キロ後方の高台まで後退した。

③中隊本部を川の右手台地に、我が小隊は左岸台地に位置し、私は部下五人と共に小隊の左翼に分哨となって、山手からの攻撃の防禦の任についた（陣地は死守することなく、戦況不利と判断出来たら速やかに小隊に合流せ

よとの命令を受けていた)。

陣地を決定して、各自のタコつば壕掘りがまだ終わらない午前十時過ぎには、正面の川向のジャングルのなかから濠軍の威力偵察隊(三十人ぐらい)の姿がみられた。夜の転進を探知し、我々の後を追って来たものと考えられる。あまりにも我軍を小馬鹿にした大胆な行動を目前でするので(腰だめ銃で中腰姿の兵隊がジャングルのなかから出たりはいたりなど)、その都度狙撃したのが命中しなかった。

翌朝雨あがりの合間を利用して壕のそとに出て、各自銃の手入れをおこなっていたところ、後方の山のうえから急に自動小銃による攻撃を受けた。濠軍の威力偵察隊です。我方は敵は正面としか考えておらず、背後についてはまったく無警戒であったので、瞬時に二人の部下を即死させた。すぐ応援し一応撃退したが、再度の攻撃には戦況不利と判断したので小隊の位置まで部下二人と共に合流した(一人は襲撃時に小隊長に報告のため伝令として帰した)。

小隊の位置にもどり、残留部下と共に陣地を構築して

敵に備えていたところ、我が分哨を撃退したのに味をしめたのか今度は小隊に向かって来た。我々も警戒しておったので、応戦し兵力的にまさっていたので濠軍を撃退した。

この戦とうで敵兵一人を確実に射殺し、死体を我軍で収容しようとして小隊で申しあわせていたところ、敵は携帯無線で連絡したのでしよう。やがて陣地附近一帯に対し無数の発煙弾が飛来爆破し、一寸さきもみえないほどで一带は煙幕でおおわれた。一時間ぐらいして煙も次第にうすくなり、それではと死体収容にと壕を出た兵隊が、「死体がない」と叫ぶので、誰もが驚きの目でみたがそれらしき物はなかった。おそらく煙幕のなかで敵さんは死体運び去ったものと思う。

夜間になると、偵察隊により我軍の位置が判明されたので、迫撃砲による砲弾が的確に我が陣地頭上に情け容赦なく落下してきた。我々は反撃する装備もなく、無抵抗の壕のなかで体を沈め砲撃の終わるまでただ待つのみです。ジャングルのなかはまったくの暗やみで、隣りの壕に誰がいるかわからなく、直撃弾が誰かに命中しても

朝がこないと判明しない状況だった。

—そのときの我軍の装備はどうだったのですか。

イ、連隊砲 三門 砲彈百発

ロ、重機関銃 機関銃中隊に一銃 弾丸は一応戦闘する

程度の量は保有していたが、敵に向かって射撃する

と、即、陣地の位置が敵に知れて空襲、砲撃の返礼

がきて陣地の確保が不能となり、宝の持ちぐされ。

ハ、擲弾筒 歩兵小銃中隊の各分隊に二筒

使用弾は瞬発信管装着しており、ジャングル内での使

用は弾が樹木の枝等にふれて味方の頭上で爆発のおそれ

があつて使用不能。

ニ、手榴弾 各自一発携行、これも擲弾筒と同じ理由

で使用しなかった(敵のはボール型で投げ易く、投

擲すると三秒〜四秒後に爆発する時限装置でジャン

グル内の使用に適していた)。

—上田さんが負傷された時の状況は、どうでしたか。

十八年八月五日小隊が中隊主力から離れて遠くに孤立

しており、兵力の分散は戦術的に不利のため主力の位置

へ移動し結集して中隊の増強をはかるよう命令された。

昼間の移動は敵のこつこうの標的になるので、夜半陣地
をてっしゅうし、中隊主力の位置へ河原を渡り、崖に登
りジャングル内のまったくの暗闇中を一系列縦隊で尾根に
沿つて移動した。

途中、私は当時すでにマラリアにかかり、連日四十度
の高熱が続き体力は極端に消耗して足元はふらつき、銃
を杖がわりに無惨な姿で歩いており集中力を欠いてい
た。くだり坂にさしかかった折り、石ころに左足が取ら
れすべり、重心を失い横転すると同時に体が宙に浮いて
したのみぞの様な場所に転落した。途中体が一回転し
て、うつぶせの状態で頭からおち頭部と左膝を石で強打
したまでは覚えておるがその後は氣を失っていた。

頭には鉄帽を装着しており、異状なく助かったが、左
膝関節の三か所から出血し物すくはれあがり、複雑骨
折のよう痛みがひどく足は全然感覺を失つてまったく
歩行不能になった(台地から下までは六〜七メートルと
思う)。部下に助けられ中隊本部の壕で過ごしたが、処置
の方法も回復の見こみもないと衛生兵が判断し、三日後
の夜半、戦友による担架で後方の野戦病院へ送られた。

—その当時の食糧はどうやって調達したのですか。

道路作業中の食糧も配給が少なく、腹が減っては戦さ
ができないと、食べられる物は何でも口のなかにいれ
た。(バナナの木の芯・野草・菊等)。なかには猛毒の芋、
そら豆等を間違えて食し、生体実験して死亡した兵隊も
でた。

私も兵隊が料理した毒芋のはいった味噌汁を知らず、
芋を口のなかにいれたとたん、ぐぁーんと電撃的しょう
げきが走り、思わず口外に吐きだしたが、その後一週間
ぐらい口中がしびれて牛のよだれのようによだれが流れ
とまらなかつた。私は助かったが兵隊でこれを飲みこん
だ者がいて三十分間ぐらい苦しんで死亡した。

また、濠軍では制空権をにぎっており、空から日本軍
の攻撃は皆無で心配なく、まったく警戒に無関心であ
り、山の中腹に陣取る敵の幕舎からは、毎日、午前と午
後の各一回お茶の時間でしよう、煙が盛んにのぼるのを
望見した。それに反し我軍は炊飯の煙をだすと、即時、
敵に発見され、例の通り迫撃砲の砲撃や空襲のお見舞い
が参上するしまつて、火気の使用は絶対するなどの厳命

であったので、やむをえず生の米を食べて飢えをしのい
だ。

—兵力・火力は大へん違う日本軍はどうやって抵抗し
ていたのですか。

敵陣地の幕舎は前に申した通り、山の中腹にふじんし
て、我々との本格的近接戦とうをさげ、前面にはもっぱ
ら威力偵察隊をもって接触をはかっていた。

我が軍の陣地を確認すると後方陣地からの砲撃と、昼
間は定期便の空襲のくりかえしでジャングルが赤はげに
なるまで攻撃してくる。我が陣地がぼろろして、確保が
不能となって撤退するまで砲爆の攻撃をつづけた。この
敵陣地を攻撃してふんさいするには夜襲が最良の戦法
で、また、それしか我軍に残された手段はなかつた。

私が負傷する数日前だが、九月三十日頃我が第一小隊
(隊長徳永少尉)に夜襲の命がくだり全員切りこみ隊と
なり戦死を覚悟で夜半十時頃出発した。情報では、これ
まで各地の戦とうで夜襲によって多大の戦果をあげ成功
しており、敵軍は夜間を極端に恐怖、陣地の警戒には大
変な神経を使って周囲にはピアノ線を張りめぐらし、要

所にし集音マイクを取りつけ、その方向には銃機を指向（標定）して日本兵の接近の音を捕捉すると、即時発射して防戦出来るようだ。これまで他中隊で数回敢行したが敵陣地前でこの防衛網にかかり戦死者ぞくしゅつし失敗に終わった。

夜のジャングル内部は大樹が無数に繁茂しており、（木は三十メートルぐらいの高さで先端に葉が繁つておる）昼間でも太陽光線があまりしたまで届かずうす暗い。夜襲当日は月夜であったが、梢に月の光がごく細く差しこむ程度でまったく暗闇で一人歩きは不可能の状態であったそのうえ、夜襲はいうまでもなく燈火の使用は厳禁なので、落伍者や行方不明者の統出を防止する方法として、各目の背中に夜光虫の付着した枯れ木を取りつけ、前進にあたっては、前後の兵隊が互いに手をつなぎ離れないようにした。この着想は大変に結構でよかったが、肝心の先頭を行く兵隊は迷惑なことで、盲人が手さぐりで歩行するよう遅々として進まず、明方（三時頃）まで約五時間も歩きつづけたが、敵陣地近くまで到達できず、一戦もまじえることが出来なかった。夜が明

ければ敵に発見されると、指揮官の判断で早々に帰陣した。

—それでは話をもとにもどし、負傷の状況とその後の処置を伺いましょう。

最初に運ばれた野戦病院は戦場近くの簡単な壕のなかで、軍医の診断と傷口のガーゼ交換の応急手当を終え、即時つぎの後方の野戦病院にたん送された。熱帯地のことで傷口の化膿は早く、そのうえうじ虫が傷口にふ着したので衛生兵にピンセットで取りのぞいてもらった。骨折は早急になおるものではない、軍医が診断時に押してみると骨がグラグラと動くので、処置なしと後方病院へ転送とぎまった。

マダンの野戦病院（十一月十日頃）は、軍司令部所在地で、これまでの病院より少しは病院らしい施設かと内心期待したが、それに反し九五式の天幕を張った簡素な設備が十張り程度散在していただけだった。患者は担架のまま幕舎にいれられ、路地に担架をベット代わりに並べ使用する貧弱な病院であった。

負傷から一か月を経過し傷口は一応回復したが、骨折

は野戦でそえ木をあてただけで手当もなかった。この幕舎で一週間の入院生活中、私の隣に患者が運ばれて来たが、重病人らしく体は衰弱し、マラリヤ患者特有の黄色い顔色をしており、一言も口をきかず翌日の午後三時頃眠るようにして死亡した。

死体をそとに運び出すと、すぐつぎの患者が来たが同様な状態で死亡と、連続七人の兵隊の死におうた。死ぬ二時間ぐらい前になると、ヤシの木にいる赤蟻が多数顔面に寄ってくるのは、動物的感覚で死期を知るのでしようか、不思議な現象をみた。マダンの野戦病院からウェーク病院までは海上トラック（五百屯ぐらいの船）に便乗した。

十九年一月二十日

ウェワーク野戦病院には内地還送用の病院船が待っており、内地行きの最後の病院船で同港を出航し、途中パラオ島病院（約十日間）およびマニラ陸軍病院（約二か月間）を経て広島の宇品港に上陸、広島陸軍病院に入院（十九年四月十八日）した。

十九年六月二十四日

つづいて前に師団のあった京城陸軍病院に入院。

十九年八月十日

膝の骨折は一応治癒したので原隊に復帰

（朝鮮第二十二部隊）

十九年九月一日

予備役軍曹に任官

二十年一月二十日

朝鮮光州の師団管区歩兵補充隊に転属

二十年十一月四日

博多に上陸、召集解除したのであります。

私が戦争に参加して痛感したことは次の通りです。

一、現地の氣候風土の事前の調査に対する対策

イ、地図の皆無

ロ、マラリヤ対策

二、精神的なものを過信し、最後の決は白兵戦と、米軍

とは对象的に竹槍戦法を重視

三、孫子の兵法ではないが、敵軍の兵力軍備等、物量戦

法を軽視

イ、敵軍は人命を尊重。

ロ、砲爆を重視し白兵戦を避けた。

— ニューギニア戦の貴重な、悲惨な体験、順序を追って資料をもとにお話をいただき有り難うございました。